

# 研究の概要（総論）

【2年次】

# 仲間との協働を通して個を磨く生徒の育成

～学びの車輪を回す「協働的な学び」の創出(2年次)～

## 概要

本研究においては、「個別最適な学び」と「協働的な学び」の両輪をいかに駆動させるかについて追究していく中で、とりわけ「協働的な学び」に視点を当てて研究を進め、協働の本質的な在り方を明らかにすることを目的とした。「協働」に関する生徒への調査によると、「他の人と交流することによって、質の高い学びにつながる」「見落としていた所や発想を豊かにしてくれる」「他者の意見も取り入れながら自分の考えを深めることができる」等の意見があったものの、これはグループ学習の域を越えているものとはいえない。個別最適な学びと両輪を成すものとしての「協働」を創出する際には、より大きな力を生み出すものとして、確実に学習活動に位置付けていく必要がある。「協働」についてより強固な理論の基で実践を組み立て、大きく重たい学びの車輪を回すことのできる生徒の育成を目指したいと考える。

キーワード：個別最適な学び、協働的な学び、多様性、セルフ・マネジメント

## 1. はじめに

グローバル化が進む一方で、それに並行するように「VUCA」と称されるような予測困難な時代が、加速度的に進んでいる。

我が国においても、「サイバー空間とフィジカル空間を高度に融合させたシステムにより、経済発展と社会的課題の解決を両立する人間中心の社会」<sup>\*1</sup>としての「Society5.0 時代」がより鮮明になりつつある。

それに加え、誰の目にも明らかな地球温暖化やマネー資本主義、超高齢化社会などが大きくかつ深刻な問題と感じられるようになってきており、学校教育もまたこうした現代的な諸課題に向き合うことが必要であると考えられている。

VUCA 時代・Society5.0 時代、そしてその中で同時に現出している社会の現代的諸課題に向き合う人材を育成するためには——詳しくは後述するが——義務教育段階で「探究的な学び」や「個別最適な学び・協働的な学び」を創出していく必要がある。

そこで、本研究においては、学習指導要領でおこなべて述べられている各教科等の「見方・考え方」を働かせ、いかにして「個別最適な学び」と「協働的な学び」を

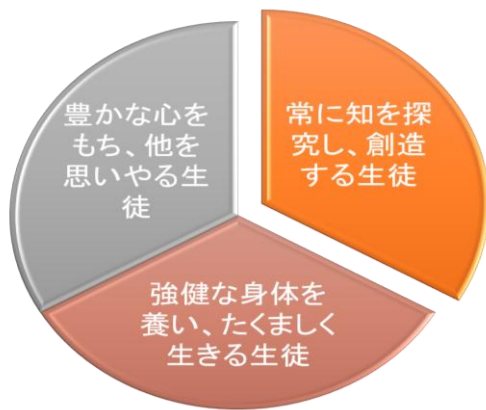
充実させ、現代的な諸課題に挑むための学習活動を創り出すことができるかを追究したいと考える。

## 2. 本校研究と教育目標との関連

前述した「個別最適な学び」と「協働的な学び」の周辺にある考え方として、文部科学省は「『令和の日本型学校教育』の構築を目指して～全ての子供たちの可能性を引き出す、個別最適な学びと、協働的な学びの実現～」(以下、「答申」)の中で「ICT の活用と少人数によるきめ細かな指導体制の整備により、『個に応じた指導』を学習者視点から整理した概念である『個別最適な学び』と、これまでも『日本型学校教育』において重視されてきた、『協働的な学び』とを一体的に充実することを目指している。」<sup>\*2</sup>と述べている。

一方、本校の教育目標は「よく見、よく聞き、よく思い『自立をめざす生徒』」である。これに対しては、先に述べたように、これからの社会の複雑化・多様化・不確実化による予測困難性の中で、一人一人が持続可能な社会の担い手として種々の事象に主体的に向き合うこそが真の「自立」であり、それが本校の生徒の目指す姿であると考えている。

また、その教育目標を具現化した「目指す生徒像」として本校が設定しているのが以下である。



本校の教育目標(知の側面)図

このうち、本校研究で目指すのは、主に知の側面である「常に知を探究し、創造する生徒」の育成である。自ら問いを立て、課題を設定し、その解決に向けて情報を収集・整理・分析した、周囲の人と協働したりしながら学びを進めて知を創造する生徒の育成を目指すことが、本校研究の根幹にある大きな展望である。

このようにして抱いた展望を基に、今次研究の主題としたのが以下である。

**仲間との協働を通して個を磨く生徒の育成**

**3. 前年次研究の内容及び成果と課題**

1年次研究では、本校に横たわる現状の課題・展望や目指す生徒像に、先ほど述べたような時代の要請を踏まえ、テーマ設定を行った。詳しくは以下である。

**3. 1. 前年次研究の内容～学びの「セルフ・マネジメント」**

今次研究を立ち上げるにあたり、本校の生徒及び教師は、共通して以下のような課題意識をもっていた。<sup>\*3</sup>

- ・自分で課題を自由に設定し、自由に周りの人と探究
- ・多くの人と話し合っ、お互いの理解を深め自主的に自ら問題を見だし、解決する
- ・自らの長所を生かす
- ・学習のゴール設定・学びをデザイン

上記はほんの一部であるため、詳しくは本校の前年度研究紀要の総論を参照されたい。いずれにしても、まずはこれらを基に、さらには前述の時代の求め等を考慮しながら研究の立ち上げを図った。

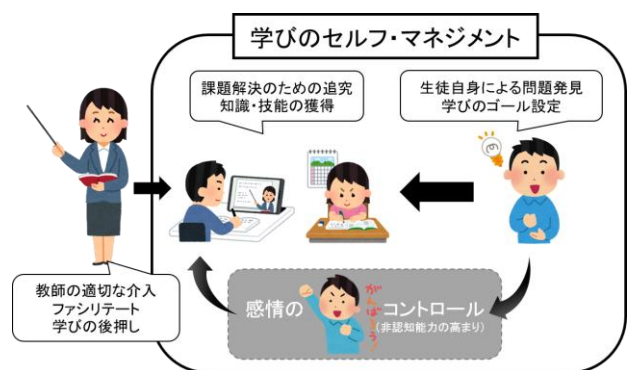
そうして行きついた1年次研究の大きなキーワードが、

学びの「セルフ・マネジメント」である。セルフ・マネジメント(self-management)とは、直訳すると「自己管理」となる。ここでいう管理とは、一定の状態を維持させるだけでなく、さらに良い方向へ主体的に発展させていくことである。先ほど述べた昨今の大きな課題となっている地球温暖化やマネー資本主義、超高齢化社会も、セルフ・マネジメントが必要とされる要因のひとつである。

高齢化の進行によって若い人材が不足する日本において、これからの社会を担う人材の一人一人が主体的に行動する、換言すれば「効率的」かつ「スマート」な組織が求められている。主体的に行動するためには、自分の技能の向上やタスク管理など、セルフ・マネジメント能力の高さが重要になってくる。そこで本校が目にしたのが「セルフ・マネジメント」ということになる。

ただ一方で、留意しなくてはならないこともある。気を付けるべきは、「セルフ・マネジメント」が、学習のゴール設定(課題設定)から探究等の活動内容、知識・技能の習得など、単元や題材の学び全てを生徒に自己決定させることではないということである。これについて、例えば奈須正裕(2021)は、「自分たちで決めて進められる学習を子どもは大いに歓迎しますし、一生懸命に取り組むのです。(中略)その一方で、たとえ学ぶ内容が決まっても、工夫次第で自己決定の度合いを高めることは十分に可能です」と述べている。<sup>\*4</sup>

つまり、これを深読みすると、生徒自身が個別に学びに対するアプローチを選択し、自己決定のプロセスにしたがって学んだとしても、学びのコンテンツやコンピテンシー自体は教師が管理する(もしくは生徒と教師が共有する)形が望ましいということではなからうか。



「学びのセルフ・マネジメント」イメージ図

これらを全て踏まえ、1年次研究では、「学びのセルフ・マネジメント」を軸として各教科等で実践を積んだ。

生徒の「個別最適な学び」を担保しつつ、本校なりにアップデートさせた以上の方策に即した1年次研究における実践について、以下で成果と課題を述べる。

### 3. 2. 各教科等で見られた成果と課題

繰り返しになるが、本校の1年次研究では、学びの「セルフ・マネジメント」を軸に各教科等で実践を積んだ。そこで得られた成果が以下である。

国語	個人の興味関心に応じて課題を選択し追究を行った結果、学びの目的意識が強くなった
社会	生徒の多様な考えを取り入れることで、結果として概念的知識の獲得につながった
数学	生徒が意思決定して、その根拠を説明することで、生徒自身が「未来を予測する」「将来使える」と実感できた
理科	科学者が自らの知的好奇心をもとに自然科学の様々な疑問や問題に向き合ったように、理科の授業を通して楽しみながら探究できた
音楽	楽章の選択を切り口として、納得するまで音楽と向き合ったからこそ交響曲の良さを味わうことができたとともに、生徒一人一人の感性を磨くことにつながった
美術	生徒たち自身が選んだものであるからこそ、必要感のある鑑賞となった
保体	自分の能力に見合った目標の設定によって、「できる」ことを実感することができた
家庭	持続可能な社会の構築の視点、快適さの視点、安全性の視点など、様々な側面から思考する生徒が増えた
英語	見通しをもってプロジェクトを進める力やうまくいかないことがあった際に、自己の練習方法を修正したりする力が身に付いた

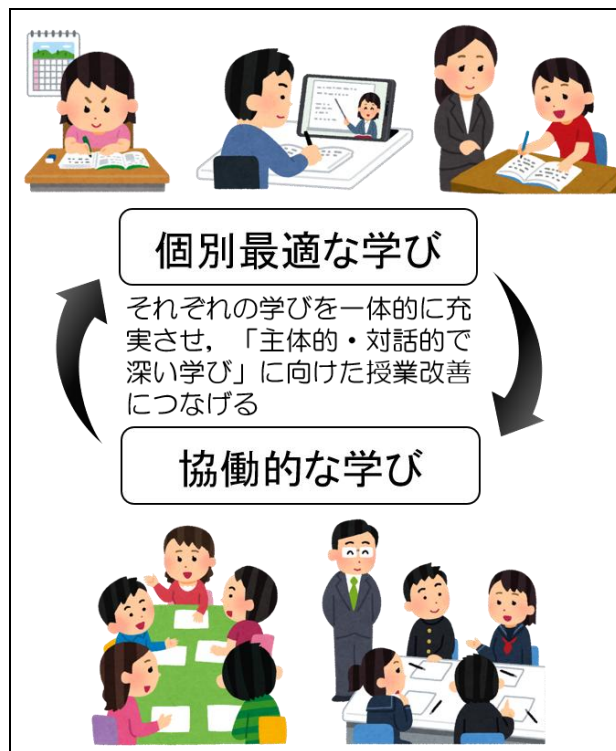
どの教科等においても、生徒の内発的な動機のようなものを、セルフ・マネジメントへとつなげることで、学びを本質的なものへと昇華させることができたようである。また、紙幅の都合でこれらの成果には書き出していないが<sup>\*5</sup>、教師の適切な介入(ファシリテート)によって、以上のような成果が表れていることは、間違いのない事実である。

一方で、以下のような課題もある。

国語	個々の生徒が交流する場面で、一人一人の多様性がどの程度発揮されているかが未知数である
社会	偶然ではなく「意図的に」生徒の協働場面を設定するにはどうしたらいいのかが明らかでない
数学	生徒全員で議論して意思決定し合意形成を図るとい

	う集団解決の場面を位置付けているが、その集団解決の場面をより充実させること
理科	自然科学をより深く学ぶための協働の在り方(自らが追究・探究したことの記述・説明の仕方)
音楽	生徒が知覚・感受したことを生かしながら、さらに思考を深めるための「協働」の要素を抽出すること
美術	グループ鑑賞の仕組みについての、新たなアプローチについて
保体	ICT機器の活用等による地域を越えたつながりをつくり、多くの他者と運動を軸に関わること
家庭	生徒同士の自然発生的な関わりを超えた、意図的な協働のデザイン
英語	英語を苦手とする生徒にとっても、仲間との学びを通して達成感を得られるような授業デザイン

本校の1年次研究は、どちらかといえば「個別最適な学び」にフォーカスしたものであった。「答申」によれば、「個別最適な学び」は「協働的な学び」との両輪で扱われることで初めて「主体的・対話的で深い学び」が実現される。そうして考えると、各教科等で出された課題にこれだけ「協働」の要素が出てくることは、ある意味自然なことであるといえそうである。



「個別最適な学び」と「協働的な学び」のイメージ

### 4. 「協働」とは

前項で触れた「協働」に類似した言葉として、しばしば「対話」というものが用いられる。まずはこれらを整理しな

なくてはならない。学習指導要領で用いられているのは「対話的な学び」であり、「答申」で用いられているのは「協働的な学び」である。無論これらの言葉は無関係ではない。「答申」には、この両者の関係について『協働的な学び』は『主体的・対話的で深い学び』に繋げて取り組まれるもの」とある。

さらに溝上慎一(2021)は、『協働的な学び』の指す範囲は『対話的な学び』をより社会や人生に繋げて発展させる学びを指すもの」と述べている。

これらはすなわち、学校教育には大きく「対話的な学び」という括りがあり、探究的な学びやSTEAM教育の文脈等で主に「協働的な学び」という概念が用いられると捉えることができる。いずれにしても、「対話が協働に用いられる」という基本構造をもつことは間違いなさそうである。

因みに、協働場面で用いられる対話について、ピーター・M・センゲ(2011)は、「ダイアログ」と「ディスカッション」に分類した後、協働場面における対話は、勝ち負けを重視する「ディスカッション」的なものではないとしている。そう規定した上でさらに、「ダイアログの目的は、私たちの思考にある非一貫性を明らかにすること。ダイアログでは、人は自分自身の思考の観察者になる。『対立しているのは私たちの意見であり、意見に対するこだわりであり、私たちではない。』自分自身と自分の思考を切り離して考えられるため、より創造的で、より受け身でない姿勢をとれる。ダイアログを通して、人は互いに助け合いながら互いの意見の非一貫性に気付くようになる。こうして集団的思考はますますだんだんと一貫性のあるものになっていく。」と述べている。

つまり、協働場面における対話は、ただのおしゃべりではなく、また言いたいことを一方的に言う場面でもなく、テーマに対する創造性や一貫性を生むための手段だということである。

本稿では、「協働」やそこでの「対話」を、このような性質のものであると規定しておきたい。

#### 4. 1. 協働におけるシステム上の問題点

協働には、しばしば問題点が散見されるし、表出しなくてもその問題を孕んでいることが少なからずある。

その「問題点」の代表的なものを、以下に示す。

頭の切れる者が問題と解決策を考え抜き、実行計画を立てる。	頭の切れる者が権限をもつ者にこの計画を認めさせる。
権限をもつ者が下位の者に計画の実行を指図する。	一つの正しい答えがあるという前提をもつ。正しい答えを知っていると確信してしまう。

社会システム論的視座でいうと、これらがチームで問題解決に臨む上での「負のステップ」になりがちなことである。要するに、トップダウン(権力主義)的発想と、唯一の正解を確信する姿勢である。<sup>\*6</sup> これらは当然、教室でも十分に起こりうる。例えば、安易にグループ・ワークを持ち掛けた時に発生する「フリーライダー」がその一例であるといえよう。

それを乗り越えるためにはどうしたらいいのか。マシュー・サイド(2023)は、以下のように述べている。<sup>\*7</sup>

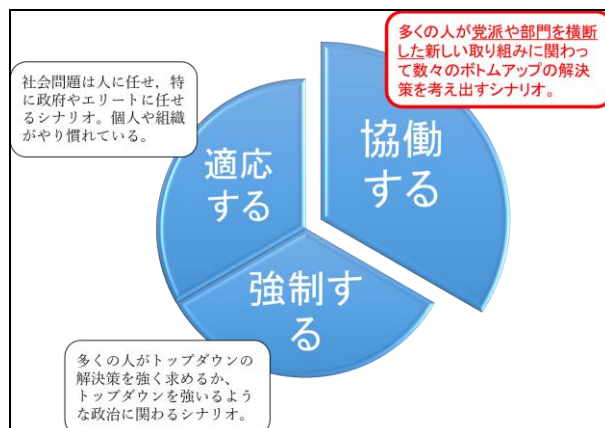
- ・ 合理主義的、直線的、階層的な考え方・やり方を保留にする。
- ・ 集結して複雑な課題に取り組む人々は、そうすることになっていたとしても、このステップはたどらない。現実には、何をするかは歩きながら見つけ出す。

ここには、「問題解決を急がずに事の本質に目を向けさせること」や「学習のステップを単線的・手続き的なものにならないこと」などの示唆が見える。

#### 4. 2. 協働の本質

前項では、協働に対する問題点とそれを乗り越えるための手立てのヒントを述べた。本項では、協働のそもそもの本質について触れる。

社会システムの中では、問題解決の際のシナリオは、大きく以下の3つに分類される。<sup>\*8</sup>



問題解決の際の3つのシナリオ

前項では、トップダウン的発想の問題点について触れたが、この図のように、「協働する」シナリオの本質は多くの人が新しい取り組みに関わってボトムアップの解決策を考え出すものである。

#### 4. 2. 1. 全体は部分の総和に勝る

「協働」の本質については、紀元前まで遡ることができる。アリストテレスは、「全体は部分の総和に勝る」という有名な言葉を残しているが、これはどういう解釈をすべきなのだろうか。

ここでは「蟻」を例に考えてみる。蟻を単体で見ても何か特別なことがわかるわけではない。ところが、蟻の巣全体は、リーダーや司令塔なしに、それぞれが別のタスクをこなして成立している。そこでは、実に「高度な社会形成」や「複雑な問題解決」が行われているのである。

社会システム論において「創発システム」と呼ばれるものがあるが、蟻の巣はまさにそのシステムを形成する。ここに協働の本質を見ることができるのではなからうか。

さらに、マシュー・サイド(2023)は「集団脳、集合知、融合のイノベーション、ネットワーク理論、こうしたコンセプトは部分ではなく全体から生まれている。今日の我々に差し迫る問題はあまりに複雑で、個人の力では到底解決できない。これからは集合知の時代だ。」と述べている。この「全体」を生むための「集合知」を教室の中にも創り出していくことが、これから求められる学びの姿なのかもしれない。

#### 4. 2. 2. 相互作用による学びの創出

次に、協働における「相互作用」というものについて考えてみたい。ヴィゴツキーは、「人は他者との相互作用を通して能動的に知識を構成していく存在である。」<sup>9</sup>と述べているが、この言説についても、協働を考える上で重要である。

三宮真智子(2018)も「私たちの学びは、社会的な文脈の中でこそ効果的に生じると考えられる。」<sup>10</sup>と述べているし、マシュー・サイドも「一人で探究していた時には思いもよらなかったような場所に行けるのであれば、それは魅力的である。」と述べている。

文部科学省が「答申」で「孤立した学びに陥らないよう」と警鐘を鳴らしている所以はまさにこれであり、逆に

いえば、学びを孤立させずに協働を創出することが、ひいては社会で生きていく術を身に付けることにつながるということに他ならない。

#### 4. 3. 誰との協働か～多様性～

ここまで、協働の本質に迫ってきたわけだが、ここからはその「方法」について少しずつ接近していきたい。協働するからには、必ず自分以外の「相手」が存在する。その相手というのは誰でもいいわけではない。選り好みした相手でも、偶然性が決定した相手でもない。誰を協働のメンバーとして認めるべきなのか。誰との協働が理想なのか。その辺りを、以下に明らかにしていく。

##### 4. 3. 1. 多様性を「認める」とは

###### ～多様性に富んだチーム編成～

社会の複雑化・多様化・不確実化による予測困難性については、本稿の「2.」で述べた通りであるし、同様に「3.」で述べた1年次研究の課題や展望にも「多様」という言葉が頻出していた。

因みに「多様性」という言葉を調べてみると、以下の結果が出てきた。<sup>11</sup>

###### 【多様性(diversity)】

- ①ある集団の中に異なる特徴・特性を持つ人がともに存在すること
- ②組織の中で互いに違う役割があてがわれていること(専門性)
- ③民族的背景・性的指向(ジェンダー・アイデンティティ)・宗教的背景など

本校研究においては、その性質から、上記のうち①と②の側面を強調して扱いたいと考えている。

マシュー・サイドは、前述の「集合知」に関する論述の中で、「全体論的なもの見方について今一度しっかりと考える必要がある。個人個人の能力ばかりでなく、チームや集団全体を見る姿勢が欠かせない。それでこそ高い『集合知』を得られる。そこで重要なカギとなるのが、多様性だ。」と述べる。多様性のある集団の方が、より豊かにイノベーションを生み出し、高い生産性を発揮することは自明である。しかし一方で問題となるのは、その多様性をいかにして「認める」かということである。

ここでは、協働場面における多様性の在り方について

触れていきたい。マシュー・サイドによれば、協働の在り方の2つの側面として、「従来型のコラボレーション」と「ストレッチコラボレーション」が存在する。

従来型のコラボレーションには以下の特徴がある。

- 一つの正しい答えがある。
- うまくいくと知っている。
- 一つの真実、答え、解決策への合意を要求する。

こうしたコラボレーションには、先ほどから述べている「集合知」や「相互作用」という面から物足りなさを感じる。

コラボレーションの場面において、正しい答えを知っていると確信してしまうと、他者の答えを受け入れる余地がほとんどなくなるため、協力するのがいっそう難しくなる。また、上記の性質をもつ従来型コラボレーションを採用してしまうと、単純でコントロールされた状況下でしか協働が機能しない。

多様な他者と協働するときは、合意がないまま、あるいはそれを超えて、一緒に前進する方法を見つけることが必要になる。そこで重要になるのが、もう一つの側面である「ストレッチコラボレーション」である。これには、前述の「従来型コラボレーション」とは違い、以下の特徴がある。

- 対立やつながりに関する先入観を捨て、受け入れ、対処しなければならない
- 多くの考え方や可能性を実験(試す)してみなければならない
- 状況にしっかりと足を踏み入れ、自分自身が行動を変えることへの抵抗を捨てなければならない

多様性を認めるということは、先入観を捨てて受け入れることであり、その中で行われる協働では、自分自身の行動を変えることに抵抗感をもってはならない。そのような姿勢をもつ(ストレッチする)ことには、痛みを伴うが、柔軟性をもたらす。そしてそれが、「集合知」や「相互作用」を生み出すきっかけになるのである。

#### 4. 3. 2. 多様性の普及例から教育を俯瞰する

前述のように、多様性の中で行われる協働は、それに介入する人や組織に柔軟性をもたらし、「集合知」や「相互作用」をもたらす。さらに言えば、能動的に知識を構築していく契機となる。

このことの論拠を挙げるとすれば、その一つに株式市

場の価格システムがある。市場がこれだけ複雑な状況下にありながらも、実に効率よく機能し、資本主義社会を支えている。また、本稿でも参照したが、Wikipedia などのオープンソースもその例として挙げられる。

このように、誰でもアクセスできるプラットフォームが広く普及しているのは、異なる人々がもっている多様なソースをうまく統合しているからに違いない。

現代社会において、多様性が新しい価値を生んでいくこうした現状を鑑みると、教育という縮小化された社会においても、多様性をもつ者どうしが協働することで新しい価値を生むような、そんな仕組みづくりを意図的に行うことが重要であるといえよう。

#### 4. 4. 多様性を機能させる「共有ビジョン」

～スコープの大きな問い～

様々ある協働の目的を考える時、「4.」でも述べたように、「一貫性」がキーワードになる。学校や社会等の組織で求められることといえば、まずは「共有ビジョン」を設定し、それに向かって多様な活動に一貫性を与えることである。そしてその共有ビジョンの基に協働し、「自分たちの組織」という認識をもつことが肝要である。

ただし、共有ビジョンを設定すれば全てがうまくいく(協働が十全に機能する)、というわけではない。ピーター・M・センゲ(2011)は、ビジョンに対する姿勢を7段階に分類している。

段階	内容
①コミットメント	責任をもって取り組む約束
②参画	計画の段階から関わる
③心からの追従	ルール遵守(コンプライアンス)
④形だけの追従	関わっている態度だけ見せる
⑤嫌々ながらの追従	内心は従っていない
⑥不追従	ビジョンに従わない
⑦無関心	ビジョンに関心をもっていない

共有ビジョンに対する7段階の姿勢

無論、①が理想の組織の姿である。ただ、事前に①があつてビジョンが生成されるものではなく、かといってビジョンは組織に押し付けるものであつてもならない。①をもたらす理想的なビジョンは、多くの人が心から打ち込めるものであり、共有ビジョンに自分自身の個人ビジョンが反映されるものである必要がある。

そうしたビジョンづくりには様々なプロセスがあるだろうが、結局のところ、ビジョンづくりのプロセスは「探究のプロセス」であり、自分たちが本当に創造しようとしている未来の探究なのだといえる。そこにこそ、構成員からコミットメントが得られる原因(源)があるのであろう。

そう考えた時、本稿で取り上げたいのが「大きなスコープ(活動の及ぶ範囲・視野)の設定」であると考え。組織のコミットメントを取り付けるのに必要なものが「動機付け」のようなのだとすれば、強い動機付けには「スコープの大きな問い」\*12 を設定することが有効である(藤原さと, 2023)。

スコープの小さな多数の問いは機械的な作業を生み出す。そのため、センゲの7段階でいうと④～⑦の態度が表出しやすい。しかしながら、スコープが大きく広がるような問いが共有のビジョンとなった時、協働で取り組める課題解決の要素も出てきて、「自分が何に寄与したらいいのか」と自分ごととして考えさせる契機となる。

本校の実践研究においても、そうした「スコープの大きな問い」によって適切な共有ビジョンをもたせ、理想的な協働を生みだすことを目指したいと考える。

#### 4. 5. 探究における協働～魅力的な軸の設定～

本校研究で目指すのは、主に知の側面である「常に知を探究し、創造する生徒」の育成である、ということは本稿の「2.」ですでに述べたところである。この「探究」に、ここまで述べてきた「協働」をどう位置付けていくかということが、2年次研究の大きなファクターである。

##### 4. 5. 1. 協働する力を3つに整理すると

探究における協働を考える前に、そもそも学習の文脈における「協働する力」とは何なのか。これについて、藤原は以下のように整理している。

- ・ 軸を設定する力
- ・ より大きく重い車輪を回す力
- ・ 新たな車輪を設定し、学び続ける力

藤原(2023)「協働する力」

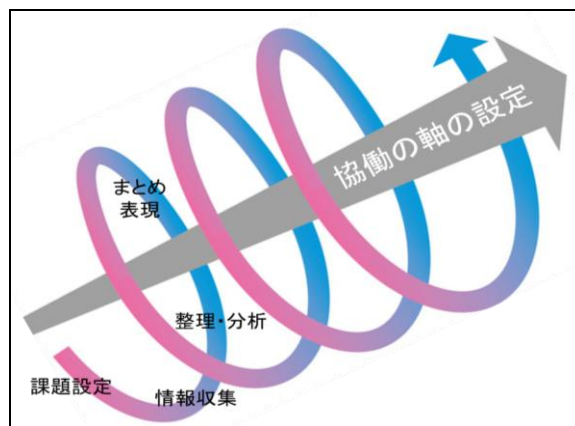
これらは、単体で考えるものではなく、連続したもの——あるいは螺旋状になっているもの——として捉えるべきである。つまり、学びを探究のサイクル(例えば、「課題設定・情報収集・整理分析・まとめ表現」等)で考える

必要があるということである。

さらに、これらのサイクルを一人でこなす場合と、多様な他者と共にこなす場合とでは、異なるイメージを描く必要がある。それを以下に詳しく述べる。

##### 4. 5. 2. 魅力的な協働の軸(探究の軸)の設定

前述の藤原の「協働する力」を参考にした協働での探究モデルが以下である。



協働の軸を設定した探究のモデル

前項で述べた「軸を設定する力」における「軸」とは、この図で表した「協働の軸」であり、探究活動の中心を貫いている。無論この軸は、何でもいいというわけではない。生徒にとって魅力的な問いであり、解決したい問いであり、かつ教科の「見方・考え方」を十分に働かせなくてはならない本質的な問いである必要がある。

この軸を適切に設定することで探究活動における協働が駆動し、一人では解決できなかったような問題が解決し、長い時間軸や広い空間軸の中で学び続ける力となると想定している。

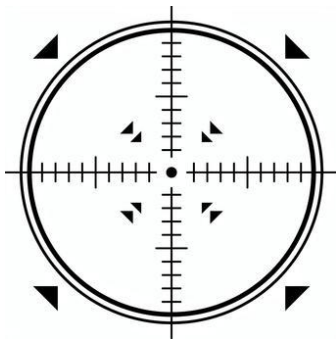
#### 5. 各教科等で記述したい「協働」

ここまで「協働」というものについて、大きく3つに分けて述べてきた。まとめると以下になる。



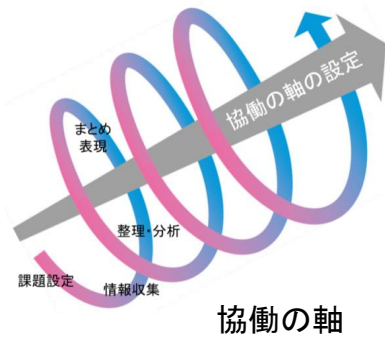
多様性

① 多様性に富んだチーム編成  
多様なチーム編成が、学びに大きな効果をもたらす。



共有ビジョン

② スコープの大きな問い  
協働で取り組む課題の抽象度を見極め、スコープの大きな問いを用意することで、協働が生まれる可能性がある



協働の軸

③ 魅力的な軸の設定  
魅力的で本質的な探究の軸を設定することで、協働が生まれる可能性がある

本校の実践研究においては、1年次のセルフ・マネジメントを土台として、2年次ではこれまで述べてきた理論を基に、各教科等の単元・題材設計や授業実践を行っていき、個別最適な学びと両輪を成すものとしての「協働的な学び」を創出したいと考えている。

## 6. 研究主題と副題

これまで述べてきたように、これからの時代を生き抜く生徒の育成に向けて研究を推進するにあたり、2年次の研究主題と副題を以下のように掲げることとした。

### 仲間との協働を通して個を磨く生徒の育成

～学びの車輪を回す「協働的な学び」の創出(2年次)

1年次研究でも述べたが、「磨く」というのは、「知を探究する」ということである。「探究」とは、物事の意義や本質などを探って見極めようとする営みであり、無駄を削ぎ落して必要なものを獲得する営みであるといえる。本校では、そうして自らを輝かせる生徒の育成を目指したいと考えている。

また、「探究」を学習の文脈で捉えるならば、生徒自らが課題の解決に向けて動く連続した学習活動のことであり、その中で生徒は自分(もしくは自分たち)で課題を設定し、情報収集、整理・分析を行い、必要に応じて仲間と協働しながら課題解決に向けて学習を進めていく。

この一連の学習活動によって、思考力や判断力といったスキルが育成され、表現する力や創造する力も養うことが期待される。

本校の2年次研究では、生き生きと豊かに「個を磨く」と共に、多様な他者と協働して新しい価値を生むことができる生徒の育成を目指し、各教科等における実践を積み重ねていきたいと考える。

(研究部 嶋田 善行)

## 注釈

\*1 内閣府 HP

[https://www8.cao.go.jp/cstp/society5\\_0/](https://www8.cao.go.jp/cstp/society5_0/)

\*2 中央教育審議会.『令和の日本型学校教育』の構築を目指して～全ての子供たちの可能性を引き出す、個別最適な学びと、協働的な学びの実現～. 令和3年1月26日

\*3 詳しくは、北海道教育大学附属旭川中学校.「研究紀要(70)」の総論に述べている。

\*4 奈須正裕「個別最適な学びと協働的な学び」より

\*5 詳しくは、北海道教育大学附属旭川中学校.「研究紀要(70)」の各教科編に述べている。

\*6 マシュー・サイド(2023)による

\*7 マシュー・サイド(2023)による

\*8 アダム・カヘン(2018)

\*9 Vygotsky, 1978

\*10 「先端教育」(2021年8月号)学校法人先端教育機構出版部

\*11 Wikipedia より

\*12 藤原は、この問いのことをマクタイ&ウィギンズを参考に「本質的な問い」「協働する問い」とも呼んでいる。

## 参考文献・論文

(1)北海道教育大学附属旭川中学校.「研究紀要(68)」

(2)北海道教育大学附属旭川中学校.「研究紀要(69)」

(3)北海道教育大学附属旭川中学校.「研究紀要(70)」

(4)文部科学省.「学習指導要領 解説」.2017

(5)文部科学省.「Society 5.0 に向けた人材育成～社会

- が変わる、学びが変わる〜」.2018
- (6)文部科学省教育課程政策課編.「中等教育資料(令和元年10月号)」。学事出版.2019
- (7)文部科学省国立教育政策研究所教育課程研究センター.「学習評価の在り方ハンドブック」。令和元年6月
- (8)中央教育審議会.「『令和の日本型学校教育』の構築を目指して〜全ての子供たちの可能性を引き出す,個別最適な学びと,協働的な学びの実現〜」。令和3年1月26日
- (9)ピーター・M・センゲ.「学習する組織 システム思考で未来を創造する」。英治出版.2011
- (10)ピーター・M・センゲ他.「学習する学校 子ども・教員・親・地域で未来の学びを創造する」。英治出版.2014
- (11)溝上慎一.「アクティブラーニングと教授学習パラダイムの転換」。東信堂.2014
- (12)梶田叡一.「アクティブ・ラーニングとは何か」。金子書房.2015
- (13)西岡加名恵.「『資質・能力』を育てるパフォーマンス評価 アクティブ・ラーニングをどう充実させるか」。明治図書.2016
- (14)岸学「21世紀の学習者と教育の4つの次元—知識,スキル,人間性,そしてメタ学習」。北大路書房.2016
- (15)奈須正裕.「『資質・能力』と学びのメカニズム」。東洋館出版社.2017
- (16)石井英真.「アクティブ・ラーニングを超える授業」。日本標準.2017
- (17)田村学.「深い学び」。東洋館出版社.2018
- (18)藤田由美子,他.「ダイバーシティ時代の教育原理—多様性と新たなるつながりの地平へ」。学文社.2018
- (19)アダム・カヘン.「敵とのコラボレーション 賛同できない人,好きではない人,信頼できない人と協働する方法」。英治出版.2018
- (20)アーリック・ボーザー.「Learn Better 頭の使い方が変わり,学びが深まる6つのステップ」。英治出版.2018
- (21)北村友人/佐藤真久/佐藤学.「SDGs 時代の教育—すべての人に質の高い学びの機会を」。学文社.2019
- (22)国立教育政策研究所.「『指導と評価の一体化』のための学習評価に関する参考資料」。東洋館出版社.2020
- (23)北尾倫彦.「『深い学び』の科学」。図書文化.2020
- (24)奈須正裕.「個別最適な学びと協働的な学び」。東洋館出版社.2021
- (25)マシュー・サイド.「多様性の科学 画一的で凋落する組織,複数の視点で問題を解決する組織」。ディスカヴァー・トゥエンティワン.2021
- (26)加藤幸次.「個別最適な学び・協働的な学びの考え方・進め方」。黎明書房.2022
- (27)合田哲雄,他.「教育科学国語教育『理論×実践で追究する国語の個別最適な学び・協働的な学び』」。明治図書.2022
- (28)奈須正裕.「個別最適な学びの足場を組む」。教育開発研究所.2022
- (29)藤原さと.「協働する探究のデザイン」。平凡社.2023